

水痘流行の注意

本康医院 本康宗信・静岡薬剤耐性菌制御チーム
 静岡県立静岡がんセンター 感染症内科 倉井華子

水痘は、2014 年からの定期接種の効果もあり発症数は減少しています。多くは 9 歳未満に認められますが、2025 年 24 週では報告数の増加が示され¹⁾、2026 年に入っても、各地で水痘の報告が増えており、北海道や神奈川県の一部では注意報が出ているところもあります。発疹が出現する 1,2 日前からの高熱、その後に紅斑、水疱、丘疹が出現するのが典型的な経過です。水痘ワクチンの接種後 42 日以上経ってから発症した場合はブレイクスルー水痘 (breakthrough varicella: BV) と呼ばれ、発疹数が少なく、水疱が形成されない場合があり、診断しにくい経過をとることがあります。

水痘の感染経路として、ウイルスを含有した飛沫による感染、飛沫核による空気感染、水疱の内容に含まれたウイルスによる接触感染が挙げられます。未罹患でワクチン未接種の方では感染しやすいといえます。そのため標準予防策に加えて、空気、接触予防策をとる必要があります。病院では、院内感染がおこると病棟閉鎖する事態になり得ますので、医療者も十分注意しなければなりません。多くの医療従事者は、入職時にワクチン接種歴や抗体価が測定されていると思います。介護施設や学童保育で仕事をされている方では、確認されていない場合も見受けられますが、本来確認が必要です。20~30 歳代の抗体保有率は、90% 台ですので特に注意が必要です (図 1)²⁾。



図 1 年齢/年齢群別の水痘抗体保有状況の年度比較、2020~2024 年

免疫健常者においては 1 週間ほどで水疱は痂皮化し、治癒に至ります。成人では高熱、咽頭痛が主な入院理由になったという報告があります³⁾。稀ではありますが、肺炎、髄膜炎、脳炎や血管炎に伴う脳梗塞などの合併症を認めることもあります。免疫低下例では、重症化することがあり、入院の上、慎重な経過観察が必要です。水痘の予防はワクチンであることは言うまでもありませんが、带状疱疹患者との接触到に注意する必要があります。

带状疱疹は水痘と同じウイルスの再活性化で発症します。带状疱疹が伝播することはありませんが、免疫のない方では水痘を発症することがあります。带状疱疹では、皮膚の水疱病変との直接的な接触の他、感染者の水疱や粘膜からの分泌物が付着した物品から間接的に伝播する可能性があります。また唾液内にもウイルスが存在するため、免疫のない接触者は水痘を発症する可能性があります、注意が必要です。免疫正常者では、患部を被覆した状態では、標準予防策をとりますが、免疫の状態により感染対策が異なります(表 1)⁴⁾。

表 1 带状疱疹患者の感染管理⁴⁾

	限局性	播種性
免疫健常者	病変を被覆 痂皮化するまで標準予防策	病変が乾燥、痂皮化するまで 空気予防策、接触予防策
免疫不全者	播種性带状疱疹が除外されるまで 空気予防策、接触予防策 除外後 病変を被覆 痂皮化するまで標準予防策	

原発の皮膚分節と隣接した分節以外に 20 個以上の散布疹を認める場合には、播種性带状疱疹と考えられ、空気感染による感染拡大のリスクが高くなります。また、新規の病変が 1 週間以上出現する場合には、免疫不全の関与を考える必要があります⁵⁾。

通常母親に免疫があれば、生後 3 か月までは水痘に感染することは稀とされています。分娩 5 日前から出産 2 日後に、妊婦が水痘を発症した場合、新生児は生後 5~10 日頃に水痘を発症し、母親に免疫がなかった場合には重症になる可能性が高くなります。この場合、アシクロビルもしくは免疫グロブリンによる予防投与が推奨されます。母親が妊娠 20 週から分娩の 21 日前までに水痘に罹患すると乳児带状疱疹を発症する可能性が高いこと、1 歳未満で水痘に罹患すると、乳幼児期に带状疱疹を発症するリスクが高くなることに留意します⁶⁾。

水痘が重症化し入院となると、病棟調整が必要です。免疫低下例、ワクチン未接種の新生児、乳児への感染を防ぐために、相応の予防策と同居家族を含め、ワクチン接種について再確認します。带状疱疹患者は高齢者に多く、家族内で年少者や免疫不全者がいる場合、適切な予防策(表 1)をとるように指導が必要です。

水痘ワクチンの接種対象年齢において、長期に渡り療養を必要とする病気にかかっていたために、定期接種を受けることができなかった場合、長期療養特例として、接種可能となった日から2年以内に定期接種を受けることができます。助成については、お住まいの自治体にご確認ください。

- 1) <https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/idwr/featured/2025/24/index.html>
- 2) <https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/nesvdp/graph/YearComparison/vzv2024/2024/20250602154218.html>
- 3) 高山直秀,他:成人水痘入院症例の検討:臨床像,重症度,感染経路および合併症. 感染症学雑誌 第71巻 第11号 1113-1119 1997
- 4) 伊東直哉、倉井華子編:感染対策の手引き 中外医学社 2024
- 5) Dworkin RH, et al.: Recommendations for the Management of Herpes Zoster. Clin Infect Dis. 2007 Jan 1;44 Suppl 1: S1-26. PMID:17143845
- 6) 渡辺大輔:痛みを伴う集簇する赤い斑点と水疱. 小児科診療 Vol.89 No.1 47-51. 2026